

日本産業衛生学会東海地方会

地方会ニュース

発行所 日本産業衛生学会東海地方会
 〒470-11
 愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98
 藤田学園保健衛生大学医学部公衆衛生
 学教室内 電話(0562)93-2453
 発行責任者 島 正吾

(題字 皿井 進筆)



生地工場検査工程
ノリタケカンパニー提供

次の世代へ、手を携えて

加藤 竹男



「昨日のために今日があるのではない。明日のために今日があるのだ」という言葉を借りれば、トシのことをとやかく言うべきではないかも知れない。とはいえ思えば長くこの道を、いささかバテた感なきにしもあらずの昨今である。

法の整備が十分でなかった昭和20年、30年代。安衛法施行前後の40年代。そして量より質と法規

がまとまって来た50年代。先輩友人のご指導を得てそれぞれの時代を飛んだり、跳ねたり、バックスの神に同席を乞うてグチったり。光栄あるこの欄を執筆するときその思い出が去来する。

時代が変われば話題も変わる。しかし労働力高令化を除いてテーマの名前は変わっても、内容はあまり変りはないようにも思う。メンタルヘルスは20年代特に30年代は「人間関係」などの論議で匂いをかいたように思う。F・A・O Aそのものは別としてそれに伴う諸問題(メンタルヘルスも入る)は「順応・適応」の言葉で味見くらいはした? 健康・体力づくりまたしかり。今日のように深刻でなかったのは技術革新のスピードを予知出来なかったことと筆者達も社会も高

令でなかった故であろうか。21世紀の健康管理に希望と理論は言えても、自らの生命を含めて責任は負えない筆者は、産業医だけでなく若い世代の積極的参加を熱望する。新しい名実ともに若い頭脳が流入し、今日の問題に取組み次代につないで頂きたい。その意味からも各種団体がネットワークを組み活動に、勉強に、生産性?をあげるよう最近度々提案している。

30年、40年代地方会などを特に皿井先生を中心に、学者・衛生管理担当者・産業医がワイワイいていた時代が懐しく、成果もあったように思う。ここ数年各分野での会合が充実した活動をする姿を見て大変敬服している。各論が違うのだから、会合・団体の種類が多いのはそれはそれで当然と思う。しかし目指す方向は一つなのだから、後進の若い力が活用し易く、乏しい能力ではあるが筆者も協力出来るようなネットワークが出来ないものであろうか。

昭和60年3月11日午前10時5分、約21年の歳月をかけ青函トンネル貫通。ただしその活用に頭を痛めている。

翌3月12日ソ連新書記長にゴルバチョフ氏選出、年令54才。

(ノリタケ・カンパニー産業医)

最近の学会研究会活動

サテライト・シンポジウム

第58回日本産業衛生学会

今回の学会は、産業医大を主会場とし3月27日より開催されたが、小生は26日の体力問題研究会より出席した。

初めて訪れた同大学は北九州市郊外の高台にあり、素晴らしい環境の中に附属病院を始め、ラマツィーニホール、大学本館その他の建物が濃赤色の外観で統一され配置されている。

先ず26日の研究会では、各企業の体力づくり活動の紹介と、労働者に必要な体力とか、適切な判定指標などに真摯な討議がなされた。特に「トヨタ」の腰痛対策を一例とした運動は、今後の体力づくりの在り方を示唆したものと注目された。27日の特別研修会は、健康づくり・体力づくりがテーマであり、講演Ⅰでは積極的な健康づくりには、先ず健康の概念を再考する必要性が強調され、講演Ⅱでは、在米日系人についての多年の健康調査と、栄養指導の研究成果が発表されたが、聴衆が楽しく理解出来る様、配慮された説明に多大の感銘をうけた。講演Ⅲでは、職場の健康教育教本が披露され、平素の努力不足を恥じ入ると共に、立派な資料を今後利用させて頂こうと考えている。28日はシンポジウムが2題あり、午前は産業保健担当者教育、午後は環境管理がテーマであり、何れも今後検討すべき問題点が多数提起され、充実した内容であった。たゞ両者共に、話題を欲張り過ぎたきらいがあり、時間的にも窮屈の様に思われた。

以上の様に、今学会の特色は健康づくりが主題の感があり、それだけに保健婦と覚しき女性の参加者も多く、華やいだ雰囲気で大変盛り上った学会であったと感じている。 (鈴木 良一)

第58回日本産業衛生学会および第38回日本産業医協議会は3月27日から4日間にわたり産業医大ラマツィーニホールと小倉の市内会場で開催された。

学会場でお会いした東芝名古屋の鈴木良一先生から学会後半の参加記を書くようにのご指示をうけた。しかし、昨年の学会とはほぼ同数の317の一般演題が10会場にわかれておこなわれ、2冊(約1.6kg)になった講演集をもって移動するのは時間的・体力的に無理であった。

一般発表の内容は中毒学分野に属するものが多く、全体の約40%を占め、次いで精神衛生を含めた健康管理関係が約17%であった。

6年前の仙台での学会、昨年の札幌の学会と今回とを報告内容別に比較すると健康管理、労働生理、視作業・VDT関係の報告は増加の傾向がみられ、頸腕、腰痛、騒音に関する報告は減少した。増加のとくに目立つのはVDTに関係したものであり、発表会場に参加者が多く熱気がこもった。VDTに関して種々の論議はあるが、現場で簡易に実施できる健康管理方式の確立が急がれるように思われた。

東海地方会関係者の活躍ぶりはめざましく、シンポジウム2題に各1名が、また一般演題は20題が報告され各会場で注目された。

学会中は気候不順であったが、夜の小倉の街角には、いくつかの小グループの歓声が聞かれた。 (滝川 寛)

第25回日本胸部疾患学会主催のサテライト・シンポジウム(日本産業衛生学会東海地方会協賛)が4月10日、「職業と呼吸器疾患」をテーマに中小企業振興会館7階の大ホールで開催された。夕暮れ深まる6時30分、一般演題聴講の疲れもみせず集った会員及び一日の仕事を終えて駆けつけた地元関係者を合わせた366名の熱気に満ちた雰囲気の中で、島 正吾、三上理一郎両氏の司会で始まった。

前半は免疫学的観点から、小林節雄氏より「職業性喘息の成因」、本間行彦氏より「農夫肺と特発性間質性肺炎」について報告があった。中でも特発性間質性肺炎の症例を丹念に調べると、約36%に粉じん(炭粉、Silicaなど)吸入歴が存在したという知見は興味深く拝聴した。じん肺との差が本質的なものかどうか、今後論議的となろう。後半は癌の問題で、横山邦彦氏より「石綿と肺癌」、千代谷慶三氏より「じん肺と肺癌」について報告があった。特にけい肺患者においても肺癌発生率が一般人より3~9倍高いという調査結果は、じん肺者の寿命が肺癌好発年齢まで伸びて顕在化してきたという仮説ともかなりの説得力を持って我々の心に響いた。

司会の島、三上両氏のコンビは絶妙で、的確な質問と議事進行、そしてそこで示唆された問題点の興味深さにグイグイと引き込まれ、アッという間に2時間は過ぎた。もう少し時間があつたらという悔しさが残った反面、密度の濃い内容に何か言葉で表せない充実感と、ともすれば揺るぎがちな社会医学的な志向に対する心の礎を再確認し得た感があったのは私だけであつたらうか。 (加藤 保夫)

第4回作業環境測定研修会

第4回作業環境測定研修会が昭和60年2月13日愛知県中小企業センターにて開催されました。この研修会は(株)日本作業環境測定協会東海支部が毎年主催しているものであり、東海四県(愛知、岐阜、三重、静岡)の作業環境測定機関、自社測定事業場等により組織され、作業環境測定に関する種々の問題について、現場で実際に作業環境測定を行なっている測定士等の技術交流を行なう場としての役割もあり、年々その内容が充実し好評をえています。今回の研修会は、その副題が「正しい作業環境管理をすすめるために」となっており、昭和59年2月に労働省から発表された作業環境の評価に基づく作業環境管理要領(いわゆる69号通達)の運用についての解説、じん肺訴訟をめぐる環境と健康事情、環境改善事例の発表がありました。このうち、じん肺訴訟をめぐる環境と健康事情については、作業環境管理、健康管理の重要性について、どのように取り組んでいかなければならないかを労働者、経営者の立場で考えなおす必要があるということのスライドを用いてくわしく説明されました。また、環境改善事例の発表は5題あり、各々その内容が具体的でありましたが、参加者(約130名)の関心は高く、細かい点についての質疑応答がフロアから活発に行なわれ、会場の予定時刻を超過してしまい、やむをえず閉会にせざるをえないような状況であり、有意義な研修会であったと思います。 (新谷 良英)

第 4 回国際産業環境・神経学会



第 4 回産業及び環境における神経学会の開会式

上記学会の英名は“4th International Congress on Industrial and Environmental Neurology”で、1984年9月24日～26日に、チェコスロバキア的首都プラハで開催された。私は9月22日に日本を立ち、フランクフルト経由でこの学会に参加したので、その概要をここに報告する。

当学会は、この分野における国際的な指導者の故Klimkova - Deuschova教授を記念して、彼女の故国で開かれた。学会長はチェコスロバキアの産業神経学者Lukas, E. 教授が努めた。学会はチェコスロバキア国の医師会、神経学会、職業医学会の3者によって組織され、チェコスロバキア社会主義共和国の保健大臣の協賛と神経学国際連盟の協力を得たと云う。

当学会への参加者は、24カ国からの213名であった。その内訳を見ると、主催国のチェコスロバキアが112名で抜群に多く、ブルガリアの19名、ポーランドの11名、ルーマニアと東ドイツの9名、西ドイツの8名がとくに目立っていた。日本からは、渡部氏（滋賀医大）、的場氏（久留米大）、鈴木氏（福島医大）と私の4名が参加した。

発表演題は特別講演が2題、一般口演64題、ポスター発表26題で合計92題であった。

学会第1日には、開会式について、ドイツ連邦共和国(西ドイツ)のDietze, A. 氏による特別講演が行われた。テーマは「Klimkova - Deuschova 教授の行った先見的な研究活動を回顧して」であった。その日の一般口演は有機溶剤中毒が10題とその他の有機物質中毒が9題であった。

第2日午前の口演は12題であり、その内訳は鉛中毒5題、水銀中毒2題他であった。同日午後のポスター発表の冒頭に、アメリカのRoizin, L. 氏による「神経精神薬で治療を受ける患者の副作用と突然死の病理学的機序」と題する講演があった。このポスターセッションでは、26題のポスター展示があった。

その内訳を見ると、有機溶剤中毒、マンガン中毒が各4題、二硫化炭素中毒3題の他、タリウム中毒、水銀中毒、カドミウム中毒が各1題あった。また、ストレスによるラットの神経活動の変化、炭鉱における運搬機械の振動測定、ヘリコプターのパイロットの感覚神経の検討、難破船生存者の生化学的・電気生理学的異常、などもあった。

第3日には、31題の口演があった。その内訳は、騒音11題、振動10題をはじめ、頸肩腕障害2題の他、産業心理学、腰痛症、電磁場、マイクロウェーブ、潜水病などが各1題であった。

学会中には、特殊な芸術分野であるLATERNA MAGICAの観劇や学会長主催のレセプションにおける学会の延長での議論と交流も楽しく、有意義であった。丘陵地に古城があり、モルダウ川が流れるしっとりとした芸術の都で、当学会における討議は活発であった。

(松本 忠雄)

労働衛生に関する研修会（日本労働安全衛生コンサルタント会主催）

大阪会場における研修会は2月23、24の両日にわたり、YMCA会館で48人が出席、東海地方から5人参加して開催された。従来1日の研修会だったが今年から2日ということで、内容の充実と懇親の場が新しくつくられた。

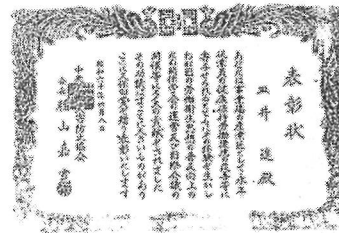
初日は死亡災害増加の中での厳しい行政の姿勢が福渡課長から報告されたあと、振動障害のいわば理論について山崎秀和先生からしっかりと教えられ、じん肺の歴史と現状について千代谷慶三先生から御聞きした。そのあと懇談会となる。

2日目はコンサルタント事例3題が報告され、それぞれ立派な業績をあげられているのに感心した。映画「粉じん職場の衛生管理」に続き、午後からは69通達をめぐるパネル「作業環境の評価について」桐原・原田・奥の三先生の話と討論を聞いた。学際的協力の大切さとその難しさを感じつつ、今後の労働衛生のキーポイントであるように思えた。休診にしてまで参加した2日間の研修の内容をかみしめながら車中の人となった。

(近藤 正人)

会員の受賞・祝賀

皿井 進先生「久保田賞」受賞される



医療法人宏潤会大同病院理事長、皿井進氏にはこのたび第2回久保田賞を受賞され、4月8日、中央災害防止協会（東京）にて盛大な授与式が行なわれた。本賞は、故久保田重孝氏の生前の意向に沿って設立された「久保田労働衛生基金」から、労働衛生分野において長年地道な努力精進をされ、顕著な功績をあげた方に贈られる。なお、皿井氏には副賞（20万円）を格別の御配慮で産業衛生学会東海地方会に寄贈された。

錫村 満著「技術者の産業医」の出版記念祝賀会開かる。



4月20日午後1時より、ロイヤルホテル弁天閣において、愛知県産業医懇談会及び東亜合成が世話役となり、東海地方の産業衛生にたずさわる人々及び東亜合成関係者約110名の参加を得て、出版記念祝賀会が盛大に開催された

この著書は副題が「塩ビによる新しい職業病との対決」となっているように、「塩ビ障害問題」をめぐる、当時この問題に挺身された産業医や技術者の方々のおりなす苦悩、喜び、希望を味わいのある文章で物語風につづったノンフィクションで、是非御一読をおすすめしたい。

定価 1200円 送料 300円

申込先〒107 東京都港区赤坂2-5-1 東邦ビル内
産業医学振興財団 電話 03(584)5421

話 題

腓骨神経麻痺

昭和50年頃“駐車場で車に乗る時つまづいてしまう”という健康相談を受けたことがあった。本人もその他の症状は余りない様である。組立工場にて働いており、機装ラインで蹲踞姿勢が多い。若者特有の脚に密着する様なジーンズをはいている。緊縛による循環障害からくる腓骨神経麻痺である。整形外科で治療し、2~3週間で職場復帰したと記憶している。直ちに組立工場にジーンズ禁止令を出し、ダブダブした柔らかい木綿の作業服を支給することになった。

丁度、環境整備が一段落して作業条件問題に移り、姿勢による腰痛問題への移行期でもあった。蹲踞も一つの姿勢の中に入る。一連続蹲踞時間、蹲踞角度、一作業中の蹲踞姿勢の割合、一日の頻度(回数)が問題となり、一作業の蹲踞姿勢の割合は30%、一連続蹲踞時間は30秒以下にすべく作業の組合せを技術員と協議し、下肢負担の問題はなくなった。工程設計上にもこの数字は取り入れられた。姿勢点30点を工程設計の目標値にしたと同様な考え方であり、同じ時期でもあった。数年間は訴える者もなく服装と作業条件対策で解決したかにみえたが、トヨタ病院の整形外科から新たな腓骨神経麻痺の報告を受け、今までの物的対策に加えて人的要因の解明に迫られることになった。年齢、経験年数などは既に調査済みであったが、新たに“どの様な人がなり易いのか”之が分れば適正配置の問題や本人への生活指導にも使えるわけである。果して圧迫による循環障害なのか？ 神経の表在性、走行性、神経自身の機能性など私の所で一番弱い問題に突き当たっている。筋電図や視覚労働の実験から現場の応用を担当している人間工学実験室の連中にも一つ新しい課題ができた。名大環研の渡辺教授の教えを乞い蹲踞姿勢による神経伝導速度の変化を調べることにした。

3月に入って間もない頃である。睡眠中脳波分析の様に現場へ応用できなかったことが脳裏をかすめる今日この頃である。

(入谷 辰男)

セロソルブ類による精巢の萎縮

セロソルブ類はシンナーなど混合溶剤の成分として広く使われている有機溶剤である。その毒性については若干の血液毒性(白血球減少、貧血)以外は知られていなかった。職場ではセロソルブ類は沸点が高く、気中濃度も常温ではそれ程高くないこと、ガス検知管が市販されておらず、ガスクロ分析でも保持時間が長く検出が難しいことなどのために労働衛生面ではあまり注目されてこなかった。しかし、今宮ら(労働衛生検査センター)が昭和51年の産業衛生学会でメチルセロソルブアセテートをマウスに投与して精巣が萎縮したことを報告した。その後、長野ら(労働衛生検査センター)が一連のセロソルブ類で実験を行ない、セロソルブ、セロソルブアセテート、メチルセロソルブ、メチルセロソルブアセテートは何れも精巣の萎縮を引き起こすことを発表して世界的に注目されるようになった(産衛学会 昭和52年、産業医学21:29, 1979, Toxicology 20:335, 1981)。そして、外国でも研究が行なわれ、セロソルブ類の精巣に対する毒性が確認された。米国のACGIHではこれらの資料にもとづいて1984年にはセロソルブ類の許容濃度を大幅に引き下げた、日本産衛学会の許容濃度委員会も1985年3月の総会で新しい提案を行なった。(下表)また、Zernikら(Environ. Health Perspect. 57:225, 1984)は雌雄のマウスにセロソルブを投与したところ、雄ばかりでなく雌の妊娠能力も障害されたことを報告しており、女性への影響も注目される。セロソルブ類は皮膚からもよく吸収されるので、これらを含有する溶剤の取り扱いには十分な注意が必要である。

(竹内 康浩)

表 エチレングリコール誘導体(セロソルブ類)の許容濃度(PPM)

Table with 3 columns: Solvent Name, ACGIH (84-85), and Japanese Industrial Hygiene Association (85). Rows include Cellosolve, Methyl Cellosolve, and Cellosolve Acetate.

S: 経皮吸収あり, ACGIHが1984年に改定を提案中
*: ACGIH: TLVs for 1983-1984, ACGIH 1984
(竹内: 労働の科学 39(10): 9, 1984)

地 方 会 理 事 会

第5回理事会

- 昭和60年1月29日 於大同特殊鋼本社 出席33名
・本部及び地方会事務局からの連絡事項(島、立川)
・本部及び地方会の委員会、研究会等の報告(加納、加藤(竹)、小森)
・産業医、産業保健婦、産業看護婦、衛生管理担当者のための研修会開催について(岩井)
・地方会ニュース第2号発刊について(岩井、加藤(保))
・昭和60年度東海地方会研修会の開催について(清水)
・東海地方会史編集状況について(井上、竹内)
・地方会ニュース第3号の発刊について(岩井)
・東海地方会誌(昭和59年度年報)編集について(島、森川)
・その他

第6回理事会

- 昭和60年3月12日 於大同特殊鋼本社 出席25名
・本部及び地方会事務局からの連絡事項(島、立川)
・昭和59年度地方学会決算報告について(鎌田)
・産業医、産業保健婦、産業看護婦、衛生管理担当者のための研修会開催状況について(岩井)
・昭和59年度事業報告(案)会計報告(案)について(島、立川)
・昭和60年度事業計画、予算について(島、立川)
・昭和60年度東海地方会研修会開催について(清水)
・昭和60年度地方学会開催について(竹内)
・地方会ニュース第3号の発刊について(岩井)
・その他

県 だ よ り

◀ 愛知県 ▶

愛知県医師会産業医部会主催の昭和59年度第2回産業医研修会が、昭和60年1月25日愛知県医師会館で、2月15日岡崎市医師会館で、いずれも「産業医の職務Q&A」を主題としてパネルディスカッション方式で行われた。

なお、昭和60年度愛知県医師会産業医部会総会は6月14日に行われる予定である。(小森 義隆)

◀ 静岡県 ▶

第2回労働衛生専門委員会(1月17日) 県内の製造業における振動障害防止対策のマニュアル作りとして始まった同委員会は、先づ県内製造業に於て現在使用されている工具の種類、保有台数、工具の性能、使用目的、工具取扱者数、使用時間等について、実態調査を行う事となり、細部につき打合せを行い、実施する事となった。

研修会準備委員会(2月14日) 昭和60年度の東海地方会研修会が、当県で実施される事となり、理事数名が集り、清水先生を中心として、研修会内容につき討議を行い別掲欄の様決定したので実施についての準備作業に入る事となった。

災防部会委員会(3月12日) 災防部会全体会議に提出する、次の議題について審議された。

- ① 昭和59年度事業結果報告について
- ② 昭和60年度事業計画について
- ③ その他

引き続き災防部会全体会議が開催され昭和59年度の事業は総て終了した。(牧角 淳)

◀ 岐阜県 ▶

岐阜県では年間計画にもとづいて2ヶ月に1回の割合で研修会を開催している。

11月26日。参加者25名。整形外科、木田公洋先生の「職場における腰痛症」の講演があり、資料として御厨潔人先生の「職場精神衛生対策の進め方」の要旨の配布説明がなされた。

1月29日。参加者34名、健康管理院々長(前和歌山医大教授)岩田弘敏先生の「頸肩腕障害とVDT作業による障害」の講演があり、資料として人事院職員局から出された「職場のメンタルヘルス、管理、監督者のこころえ」が配付された。以上の通り今回は主に静的労作による諸問題と精神衛生についての話題が中心となった。

尚2月6日に県医師会の産業医研修会があり、岐阜大学の吉川教授の「産業医と労働衛生管理」の講演があった。(井田 龍三)

◀ 三重県 ▶

1月30日に昭和59年度、第4回三重産業医会研究会が開催された。「産業保健の観点から症例を考えてみよう」というテーマで横浜ゴム森下先生、本田技研木下先生から症例の提供があった。すでに同じテーマで2回の研究会を重ねているため、大変熱のこもった討議

となった。

3月1日には本年度、第2回の看護部会研究会が開かれた。健康診断の事後措置をめぐる産業ナースの役割、現状と今後の課題などについて熱心なグループ討議が行なわれた。

その他、2月17日に三重県医師会の主催で嘱託産業医を対象とした研修会が行なわれた。日曜にもかかわらず多数の参加があった。(滝川 寛)

行 政 だ よ り

港湾作業に関し、粉じん則等が改正される

粉じんによる健康障害の防止については、粉じん障害防止規則、じん肺法、じん肺法施行規則等により法律面からの規制がなされている。その内容は、発散源を密閉する設備、局所排気装置等の設備の設置とその性能等、作業環境測定の実施、呼吸用保護具の使用、教育の実施、じん肺健康診断の実施、じん肺管理区分の決定等である。

これらの法規制が適用されるのは「粉じん作業」についてであり、その内容は粉じん障害防止規則別表第1、じん肺法施行規則別表において明示されている。今回の改正は、この粉じん作業のうち、「鉱石専用埠頭に接岸している鉱石専用船の船倉内で鉱物等(湿潤なものを除く。)をかき落とし、又はかき集める作業」「鉱物等(湿潤なものを除く。)を運搬する船舶の船倉内で鉱物等(湿潤なものを除く。)をかき落とし、又はかき集める作業」にしたものである。これは、鉱石専用埠頭に接岸している鉱石専用船の船倉内における作業から鉱物等(湿潤なものを除く。)を運搬する船舶の船倉内における作業に拡大したものである。

新たに適用することとなった作業は、鉱物等の粉じんの個人曝露の程度、曝露態様等からみて、改正前の作業における場合と同程度以上、労働者が鉱物等の粉じんに曝露するおそれのある作業と判断されたものであり、したがって粉じん作業として適切な措置を講ずべきであるとしたものである。本改正は昭和60年1月14日に公布され、昭和60年4月1日から施行されている。

愛知労働基準局労働安全課長 (尾添 博)

人事移動 60.4.1付 尾添 博 労働安全課長
宮宅 英夫 労働衛生課長

会 員 の 声

産 業 医 1 年 生

昨年4月より、岐阜市役所職員の健康管理を行う1人に任じられた。ただし衛生行政が主務で、健康管理は兼務という立場である。

1年間に、健康相談、定期健康診断、職場巡視、健康教育、等、各行事には出来るだけ参加するように努めた。しかしながら、健康管理を行なう「医者」という立場と、市職員に対する「管理職」という立場が、自分の気持ちの内では混沌として整理がつかない。従って1年間は、上記の立場が一致し易い、個人に対する指導(主に治療医との上手なつき合い方)を行なってきた。さて2年目である。1年間でマークした職場 — 学校給食調理員やゴミ収集業務等 — に対し、どのようにアプローチするか? 真価を問われそうである。

(岡本 祥成)

元禄時代の精神障害

地方会ニュースは極めて格調の高い機関誌で、第2号の島会長のごあいさつにも、清新な活力をと、編集後記もこれからの労働衛生をになうのは若いエネルギーと、何となく私どもの番ではない感じですが、ひとこと。

最近私どもの企業では、高齢化傾向とは云うものの、職場の精神衛生対策に追われることが多く、精神科の先生のご指導を仰ぐことの多いこの頃です。

神坂次郎著の「元禄御畳奉行の日記」を読んで、この時代尾張藩士も精神障害の悲惨な例をメモっているのを知りました。

当時の宮仕えの藩医即ち産業医はどんな予防策など考えたのであろうか、などと想像をたくましくさせる本でした。(松本 光雄)

これからの行事予定

昭和60年度東海地方会研修会
(日本産業衛生学会東海地方会総会)

- 期日 昭和60年6月21日(金)午前10時15分～午後4時
- 場所 たちばな会館(静岡市)
- 代表 清水善男(三菱電機静岡製作所)
- 講演 「化学物質の毒性、発がん性」
一病理学の立場より一
榎本 信(食品農医薬品安全性評価センター)

外2

第31回東海公衆衛生学会

- 期日 昭和60年6月30日(日)午前9時20分～午後5時
- 会場 藤田学園保健衛生大学医学部1号館
- 会長 大谷元彦(藤田学園保健衛生大学医学部衛生学教室教授)

第20回日本循環器管理研究協議会(日循協)

- 期日 昭和60年6月8日(土)午前9時～午後5時
- 会場 札幌市教育文化会館ホール
- 会長 安田寿一(北海道大学医学部循環器内科教授)

第25回産業健康管理研究会全国会議(全産研)

- 期日 昭和60年6月29日(土)午前10時～午後5時
- 会場 健保会館地階ホール 東京都港区南青山1-24-4
- 世話人代表 斎藤重熙(東京都管工業健保)
柴田茂男(女子栄養大学)

第2回産業看護セミナー

- 期日 昭和60年8月1日(木)～3日(土)午前9時～午後4時45分
- 会場 大阪リバーサイドホテル大ホール
- 主催 日本産業衛生学会教育資料委員会

会員の消息

(59年11月19日～60年3月7日)

新入会員 14名

- (愛知) 吉田純子(保健衛生大・医・衛生)、中村つや子(上飯田第一病院)、蓑原美奈恵(保健衛生大・医・衛生)、大川公夫(岡崎医師会公衛センター)、早川律子(名大・医・皮膚)、升倉文子(名鉄病院保健管理部)、宮地久夫(ユニ

チカ(岡崎工場診療所)、加茂裕子(加茂小児科医院)、(渡邊丈真(愛知医大・衛生)、前田 清(愛知医大・公衛)医科大学・公衛)

(三重) 中川祐子(網東芝三重工場)、山中砂知子(三重大・医・衛生)、小森富子(鈴鹿健康管理所)

(岐阜) 大口 弘(大口歯科クリニック)

退会会員 1名

(愛知) 石川泰平

転出会員 1名

(静岡) 池田賢人(神奈川へ)

転入会員 1名

(愛知) 長峰弘子(長野より)

再入会 1名

(愛知) 杉山恭子(瀬戸健康管理センター)

投稿お願い

“ニュース”、随筆、主張、文献がほしい。機器がほしい、借りたい。等々何でも結構です。

御自由に御投稿下さい。お待ちしております。

原稿は 話題 800字以内 声、願い事 300字以内

随想 600字以内 印象記 600字以内

投稿先は、事務局宛御送付下さい。

編集後記

地方会ニュースも3号目になりました。創刊号と新年号の第一面はそれなりに典型が頭に浮かびますが3号目からは編集方針によるユニークさが期待されます。編集委員会ではかなり時間をかけて議論し編集方針を決めています。編集委員の分担による準備と合議によって第一面の特色を出す方針を決めました。内容的にはこれからの正念場であり会員諸氏の一層のご協力をお願い致します。

このニュースは会員の情報交換を主眼においており、できるだけ多くの会員のご登場を意識的にお願いしています。編集委員会から依頼する原稿以外にもニュース、紹介、報告、意見、随筆など積極的な投稿を期待しています。発行は年3回(1月、5月、9月)を予定しています。原稿が多すぎる場合には次号に回ることもありますが、その節はご了解をお願い致します。(竹内 康浩)

次回発行 昭和60年9月1日予定

編集責任者 岩井 淳(三菱名古屋病院)

編集委員(五十音順)

柏木時彦(豊田健康管理クリニック)

加藤保夫(藤田学園保健衛生大学)

小森義隆(大同病院)

竹内康浩(名古屋大学)

久永直見(名古屋大学)

森川利彦(三菱電機名古屋)